

児童期における性役割の獲得

—性役割観と性役割行動の発達からの検討—

石田 英子

A Study of the Acquirement of Sex-role in School Childhood

—Developmental Analysis in the Sex-role Ideas
and the Sex-role Behaviors —

Eiko Ishida

The purpose of this paper was to study how sex-role develops in school childhood by investigating the sex-role behaviors and the sex-role ideas, and to make clear whether or not the sex-role behaviors develop after the sex-role ideas have been formed.

The subjects were about 600 school boys and girls at the age from 7 to 10. They were requested to rate how often and how many of the 15 play games they do, and to rate wheter 24 sentences, which describe sex-role traits, apply to the school boys or girls.

The results were as follows ;

First after the factor analysis, with the role of boys, we obtained two salient factors which could be referred to as "activeness" and "roughness". And with the one of girls, we also had two factors which suggested "gentleness" and "obedience".

Second, the factor scores were obtained in each factor dimension and we found the highest recognized factor was "activeness", and the lowest recognized one was "obedience".

Third, we investigated the developmental changes of the sex-role ideas, but not the sex-role behaviors.

Four, girls made the clear discrimination between the masculinity and femininity than boys thought all the grade.

Five, the sex-role behaviors didn't develop after the sex-role ideas has been formed. And the tendency that the male role's behaviors were more often appeared than the female's was found.

Key words : the sex-role behaviors, the sex-role ideas, masculinity, femininity, the school boys and girls.

問 題

社会の性役割期待は直接的・間接的に子どもに影響を与え、それは性の型づけと呼ばれる(柏木, 1973)。この性的社会化の過程は、子どもの成長に伴って、様々な生活場面において見られる。そして適切に獲得された性役割は子どもに社会的適応を促し、正常な人格の発達を助ける。従って、性役割の獲得は子どもにとって重要な発達課題といえる。

子どもは生まれた当初は、自分が男の子であるのか女の子であるのかを理解していない。3歳前後になって自覚できるようになり、学校に行く頃になれば男の子と女の子がどういふものであるかという意識を持ち始める。各々の段階で、子どもは成長とともに、どうやってその時期に適切な性役割を獲得していくのだろうか。また、その性役割の獲得の方法はどのようなものであろうか。

性役割をその概念から考えれば、性役割行動と性役割観に分けられる。Mead, Mの言う性役割の概念とは各々の性にふさわしいとされる社会的、文化的に規定されている行動様式・態度と、社会的、文化的に規定されている考え方で構成されるというものである。すなわち、前者が性役割行動であり、後者が性役割観である。性役割の獲得を解明するには、具体的にこの性役割行動と性役割観の獲得から見ていくのが最良であると思われる。特に、子供における性役割は、ちょうど獲得時期にあたる点からも、各々の発達のしかたを明らかにすることが必要であろう。

従って、本研究においては性役割行動と性役割認知との関係に着目して、子供の性役割発達を捉えたい。つまり、性役割行動と性役割観の形成の関係から性役割獲得の方法を探る。ここでの性役割行動は、子どもの生活の大半を占める‘遊び活動’を通して見る。すなわち、子供の性的社会化のなかで見られる生活場面の遊びを、性役割行動としてみなす。そして、性役割行動は、行動者が社会化によって内面化されている性役割観に規定される

という仮説を検証しつつ、性役割を発達的に検討したい。

さらに、従来の研究から以下の4点に留意する。まず、第1に、性役割獲得における性差が問題となる。各々の研究で獲得困難度において男子の優位、女子優位の立場が立証されているが、どちらとも決めがたい。柏木の研究(1967, 1972)においても女子・男子の間に発達の相違があるとされる。従って、認知発達の性差について特に注目したい。

第2に認知の対象に関してであるが、間宮の研究(1959)においては比較すべき対象がある一定に年齢の者に限っているし、柏木(1967)においても一般的な男女についての評価を求めている。性役割の認知を考える場合、性役割が文化的な規定を受け、社会的地位・年齢などが異なったものには、当然異なった役割が与えられているため、比較の対象が被験者と同年輩か否かと言う問題は重要である。従って、認知の対象を同年輩の子どもとする。

第3に研究対象であるが、従来においては、幼児期・青年期の研究が多数あるが児童期は少ない。児童期は社会的接触が深まり、精神活動も多様化し、人格形成にとり重要な時期である。この様な時期に性役割認知の調査をすることは性役割を検討していく上で重要である。従って、対象として小学生を選ぶ。

第4に、調査項目であるが、柏木(1967, 1972)では形容詞対を提示し男女の判定をさせている。しかし、形容詞対を小学校低学年に用いる場合、形容詞対そのものの難度が結果に大きく影響する。東・田中・土屋の研究(1973)は、形容詞を用いて性役割を判定させる場合、子どもにとっては形容詞そのものの難易が結果を歪める危険性があるとしている。そのため性役割特性を形容詞で示すのではなく、その特性があらわれている場面を文章で示し、その主語の性を判定させている。従って、東らの研究(1973)の質問項目と同様に文章であらわして用いる。

目 的

本研究での3つの目的を以下に述べる。

第1に、児童男女の性役割行動とみなす“遊び”の次元を抽出する。そして、抽出された次元にそって、性役割行動の発達をみたい。

第2に、児童男女の性役割観をみる特性の性役割識別の次元を抽出する。そして、抽出された次元に沿って、性役割認知の発達をみたい。

第3に、子どもの性役割行動は、内面化された性役割観に規定されるという仮説をたて、これを検証したい。

第1の目的のために、遊びの項目15項目を因子分析し、次元を抽出する。そして、そこで見いだされた次元ごとに因子別得点を算出し、各要因（学年差・性差）に着目して検討する。

第2の目的のために、性役割項目24項目を因子分析し、次元を抽出する。そして、そこで見いだされた次元ごとに因子別得点を算出し、各要因（学年差・性差）に着目して検討する。

第3の目的のために、遊びの項目の因子分析から得られた次元と性役割観項目の因子分析から得られた次元とを各々分析し、相互の関係を検討する。

方 法

調査対象：被験者の構成を表1に示す。対象者は広島県下の市立小学校児童、2年生198名（男109・女89）、4年生200名（男109・女91）、6年生200名（男107・女93）の計598名を調査対象として選定した。

調査方法：調査は1986年9月～10月に実施された。調査方法は、授業時間（40分）中に質問紙を配り、集団法で行った。4年生以上は、各自自由な速さで判定記入させたが、2年

表1 各学年・男女別人数

	2年生	4年生	6年生	合計
男子	109	109	107	325
女子	89	91	93	273
合計	198	200	200	598

生のみには、1項目ずつ調査者が音読したうえで記入させた。

調査内容：質問項目を表2に示す。

Q1～Q2は、基本的属性の学年・性別を尋ねた。Q3は、性差のあらわれる日常行動として、実際にいつもよくする遊びの名称を上位3位まで自由に記述させた。Q4は、性役割行動を調べる項目について質問した。本研究では、性差のあらわれる日常行動として実際にいつもよくする遊びの名称15項目を取り上げ、実際に被験者がその遊びをよくやっているか、あまりやらないかのどちらかに記入させる。15の遊びは、予備調査で男女小学2年生各30名ずつ計60名に対してよくする遊び上位3位までの名称の自由記述を求め、その結果から男子がよくする遊び、男子・女子両方ともがよくする遊び、女子がよくする遊びを各5項目ずつ選んだ。Q5は、性役割観を調べる項目について質問をした。項目は以下のように設定した。まず、東らの研究(1973)に用いられた性役割識別項目、35特性項目のうち男性を表す特性項目17項目（男性項目）、女性を表す特性項目18項目（女性項目）を選び、男女小学2年生各30名ずつ計60名に予備調査を行なった。これらの項目は男女についてのいくつかの特性をあげて、その特性があらわれる場面を構成し、状況を文章にしたものである。その結果、小学2年生の児童に対して言葉遣いが適当で、内容が理解可能である文章を選定し、一部文章に手直しをした。本調査では、予備調査の結果と文献を参考にして24項目の文章を決定し、表2に示すように配列した。この調査では全学年に同一の項目を使用した。各項目ごとに、その様な行動をとるのは男の子であるか女の子であるかを判定させた。この時、判定の対象は被験者と同年代の不特定多数の子どもであるとする。

結果と考察

1. 児童の性役割行動に関する処理

1) 実際によくする遊びの集計

各学年男女別に上位5位までの実際によく

表2 調査内容

質問項目	特性
1 その子は、プラモデルを作るのが好きです。* (1, 2)	(男の子の興味)
2 その子は、すわる時ちゃんと足をそろえてすわります。	(行儀がよい)
3 その子は、行ったことのない所へはひとりで行きません。	(臆病)
4 その子は、かわいそうなお話しを読むと涙が出てきます。	(感傷的)
5 その子は、すぐ「ちえっ」と言います。	(言葉遣いが悪い)
6 その子は、思いやりがあって他の人に心配をかけないようにしています。	(優しい)
7 その子は、国語が得意です。	(言語能力)
8 その子は、おもちゃをすぐこわします。	(乱暴)
9 その子は、家の中にいるより外でスポーツをするのが好きです。	(活動的)
10 その子は、おもちゃを買う時にどちらにしようか迷ってなかなか決められません。	(優柔不断)
11 その子は、難しいことを考えるのが好きです。	(理論的)
12 その子は、寝る前に次の日の学校の用意をしないと心配です。	(き帳面)
13 その子は、困ったことが起こってもあわてません。	(理性的)
14 その子は、算数が得意です。	(計算能力)
15 その子は、先生に「してはいけません」と言われたことは絶対しません。	(道徳的)
16 その子は、みんなで何をして遊ぶかを自分ひとりで決めます。	(支配的)
17 その子は、テストの点が悪いと気にします。	(心配性)
18 その子は、みんなの意見をまとめるのが上手です。	(指導的)
19 その子は、戦争の映画を観ると胸がわくわくします。	(攻撃的)
20 その子は、小鳥や年下の子どもを可愛がります。	(愛情的)
21 その子は、自分が出来ることでも自分からは進んでは引き受けません。	(消極的)
22 その子は、自分が何でも人より出来ると思ってます。	(自負)
23 その子は、他の人の意見にすぐ賛成します。	(依存的)
24 その子は、机の上が汚くても気にしません。	(無頓着)

*全項目に判断のための(1, 2)という選択肢が付くがここでは省略する。

表3 よくする遊び

		1位	2位	3位	4位	5位
2年	男子	野球	おにごっこ	ゲ-ム	ドッジボール	サッカー
	女子	おにごっこ	かくれんぼ	ゲ-ム	ままごと	なわとび
4年	男子	野球	ゲ-ム	ドッジボール	おにごっこ	プラモデル
	女子	おにごっこ	ゲ-ム	ドッジボール	かくれんぼ	人形遊び
6年	男子	野球	ゲ-ム	サッカー	おにごっこ	プラモデル
	女子	おにごっこ	ゲ-ム	テニス・バドミントン	かくれんぼ	ドッジボール

する遊びの名称を上位5位までを表3に示す。さらに、各遊びの項目と男子・女子との相関を求めた結果から、各遊びを男子のみがよくする遊び、女子のみがよくする遊び、男子・女子ともによくする遊びに分類し、表4に示す。

2) 遊びの項目の因子分析

遊びの項目15項目について、実際によくしているという回答には+1点、あまりしていないという回答には0点を与え、全学年・各

表4 遊びの分類

相関の高い遊び

男子がよくする遊び	野球 プラモデル サッカー
女子がよくする遊び	ままごと 人形遊び なわとび テニス・バドミントン
男子・女子ともによくする遊び	ゲーム おにごっこ ドッジボール かくれんぼ

学年男女別に因子分析 (Varimax Roatated Factor Matrix) を行い、第5因子まで抽出する。第1の目的に沿って分析する。因子分

析の結果は表5に示す。以下、まず第1の目的である児童における性役割行動において抽出された次元ごとの因子別得点を問題にする。

〔1〕 因子分析による次元の抽出

まず因子分析の結果から因子を検討する。表5に示されるように第1因子に全15項目の約38%、第2因子に約26%、第3・第4にそれぞれ約13%の項目が含まれている。第5因子はわずかに2項目にとどまっている。また第4因子までで全項目の約61%を説明できる。以上の諸点を総合的にみた結果、第1、第2、第3、第4因子を取り上げ、それぞれPLAY 1(以下P1と略す)、同様にP2、P3、P4因子とした。P1因子は野球、サッカー、プラモデル等の男子のみが最もよくする遊び群であり、P2因子はお人形ごっこ、ままごと等の

女子のみが最もよくする遊び群である。P3因子はおにごっこ、かくれんぼ等男子・女子に関わらずよくする遊び群であり、P4因子はあやとり、絵を画く、ゴムとび等の女子がよくする遊び群である。

次に最終的に取り上げた4つの因子について検討する。表5からP1、P2、P3、P4別に各々の絶対値が0.3以上の負荷量を持つ項目を大きさ順に整理し、表6に示す。P1因子は男子のみがよくする遊びに関する因子であり、P2、P4因子は女子のみがよくする遊びに関する因子であることが項目内容から読み取れる。

以上4つの遊びに関する因子同士の相関関係を調べるとP2とP4とのあいだに相関関係0.52というかなり高い相関がみられた。P2と

表5 遊びの項目の因子分析

項 目	FACTOR 1	FACTOR 2	FACTOR 3	FACTOR 4	FACTOR 5
1 野 球	0.54402	-0.06399	-0.05150	-0.20278	-0.04299
2 T V を 見 る	0.07157	0.02600	0.12275	-0.03457	0.43303
3 ラジコン・ミニカー遊び	0.30220	0.00768	0.08162	-0.00013	0.05043
4 ま ま ご と	-0.07891	0.62562	0.12432	0.08135	-0.03401
5 お に ご っ こ	0.01300	0.08140	0.65425	0.25265	0.04822
6 ゴ ム と び	0.03145	0.03243	0.19933	0.50349	-0.03558
7 お 人 形 ご っ こ	-0.04882	0.80156	0.03746	0.25524	0.02674
8 サ ッ カ ー	0.49320	-0.03738	0.05196	0.02853	-0.04691
9 か く れ ん ぼ	0.07224	0.10383	0.64906	0.17008	0.06945
10 ゲ ー ム	0.29584	-0.07017	0.02076	0.04351	0.16032
11 将 棋 ・ 碁	0.38763	0.00820	-0.10581	0.01827	0.20228
12 プラモデル・工作	0.59077	-0.02995	0.01473	0.00262	0.03084
13 絵を画く・ぬり絵	-0.09092	0.22609	0.10100	0.42520	0.09866
14 あ や と り	0.00600	0.11397	0.09978	0.61938	0.00960
15 漫 画 を 読 む	0.07385	-0.02507	-0.03816	0.07411	0.60204

表6 因子別項目の一覧表

P1因子		P2因子		P3因子		P4因子	
野 球	0.69	お人形ごっこ	0.85	おにごっこ	0.81	あやとり	0.72
サ ッ カ ー	0.60	ままごと	0.73	かくれんぼ	0.55	絵を画く	0.39
プラモデル	0.57					ゴムとび	0.33
ラジコンカー	0.43					お人形ごっこ	0.32
将棋・碁	0.42						
ゲ ー ム	0.40						

*P2'因子……お人形ごっこ、ままごと、あやとり、絵を画く、ゴムとび

P4は女子の遊びの因子としてひとつにまとめてP2' という新しい因子を作ることが出来る。従って、3つの遊びの因子になり、それらは内容的に相互に重複する項目は殆どなく、3つの側面を明らかにしている。

さらに、各学年男女別にも同様に因子分析を行った結果全学年の結果とほぼ一致する。以上のことから、全学年での因子分析の結果の有効性は高いと言える。

〔2〕 因子別得点による分析

児童は、遊びについて3つの次元で認知していることが示唆された。すなわち、性役割行動として3つの次元を持つということである。性役割行動の発達の傾向を各要因に着目して検討する。すなわち、〔1〕の因子分析で明かにされた性役割行動の3つの次元にそって、学年・性別グループ間の比較を行う。表6で示されたP1, P2', P3の項目について、よくやっていたら+1点、あまりやっていないければ0点を与え、その合計得点を各因子ごとに個人因子別得点として算出する。各グループ別のこの3つの次元の因子別得点の平均値と標準偏差は表7に示す。

この因子別得点の高さは、各因子が該当する性役割行動（例えば、P1は男子であり、P2'は女子である）に対して、実際に行っている性度の高さを示す。つまり、この値が大

表7 因子別得点の平均値とS.D.

		男性役割行動の因子		女性役割行動の因子			
		P1因子		P2'因子		P3因子	
		平均	S.D.	平均	S.D.	平均	S.D.
男子	2年生	2.92	1.66	0.63	0.90	0.97	0.87
	4年生	2.76	1.31	0.29	0.67	0.61	0.83
	6年生	2.90	1.21	0.14	0.50	0.52	0.74
女子	2年生	1.16	0.99	2.18	1.79	1.27	0.84
	4年生	1.24	0.98	1.37	1.30	1.00	0.86
	6年生	1.02	0.86	0.62	0.87	0.69	0.77

きいほど男性・女性役割行動によりあてはまっているということである。

因子別得点は表7にみられるようにその分布は余り、広がりを持たないが、各グループによって分布の仕方に差がある。以上の点を踏まえて、因子別得点を手がかりに各学年・男女別グループ間の変動傾向を概観する。

表7の因子別得点をP1, P2'に分け、学年別にプロットしたものが図1である。図1から3次元の有効性について相互に比較し、またグループ間の変動を見ることが出来る。

まず、t検定を行い学年差について見てみる。P1因子について学年差はなかった。P2'因子については2年生男子と4年生男子間 ($t=3.51, p<.001$)、2年生女子と4年生女子間 ($t=3.25, p<.001$)、4年生女子と6年生女子間に差がある ($t=4.59, p<$

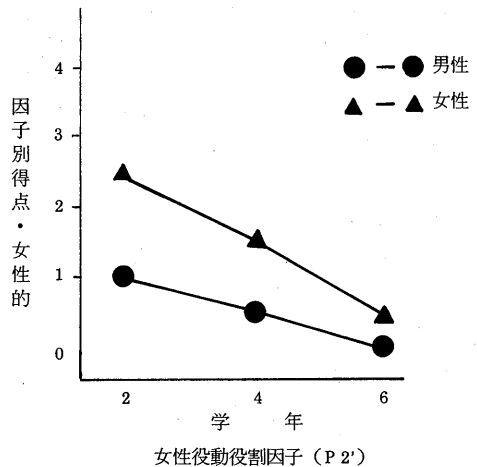
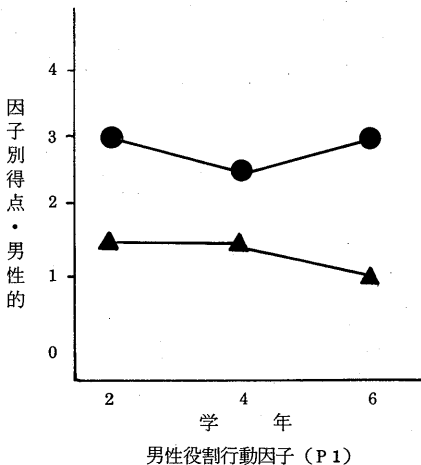


図1 因子別得点の各学年・男女別グループ別比較

.001). P3因子については、2年生男子と4年生男子間 ($t=3.30, p<.001$), 2年生女子と4年生女子間 ($t=2.40, p<.05$), 4年生女子と6年生女子間に差がある ($t=2.60, p<.1$).

同様に、性差について見てみる。P1因子においては、2年生男女間 ($t=9.08, p<.001$), 4年生男女間 ($t=9.36, p<.001$), 6年生男女間の全学年に差がある ($t=12.82, p<.001$), P2' 因子においても、2年生男女間 ($t=-7.84, p<.001$), 4年生男女間 ($t=-4.71, p<.001$), 6年生男女間の全学年に差がある ($t=-7.15, p<.001$), P3 因子においては、2年生男女間 ($t=-2.44, p<.05$), 4年生男女間に差がある ($t=-3.23, p<.001$).

以上の結果からまず学年については、P2' 因子で2年から4年生への変化は男子・女子ともにあるが、特に男子が大きい。男子は学年が高くなるほど女性的行動が顕著に減ってくると言える。女子でも4年生と6年生との間にも変化があり、学年が高くなるほど女性的行動に消極的になっている。P1因子において、男子が男性的行動を各学年ともにほぼ一定の高い値で示しているのと対照的である。P3因子の得点は男子も女子も学年が高くなるほど減少している。以上のことから、女子においては学年が上がるほど行動面に性度を(男性的はもちろん女性的も)顕著にはあらわさなくなる。

次に性差については、6年生のP3因子においてのみ有意差がみられなかった。2・4年生でP1, P2' 因子においては有意差がみられるが、学年があがるほど男女差が小さくなってきている。以上のことから、男子は学年が上がるほど男性的である行動を顕著に示すが、女性は男性的行動も女性的行動もあまり示さなくなったといえる。

2. 児童の性役割観についての処理

1) 性役割観項目の因子分析

[1] 因子分析による次元の抽出

性役割観の24項目について、男の子である

と答えた回答には+1点、女の子であると答えた回答には-1点を与えて、全学年、各学年・男女別に因子分析 (Varimax Rotated Factor Matrix) を行い、第2の目的に沿って分析する。因子分析の結果は表8に示す。

以下、まず第2の目的である児童における性役割観の特徴的な次元を抽出し、次に各次元ごとの因子別得点を問題にする。

まず因子分析の結果から因子を検討する。表8に示されるように、第1因子に全24項目の約25%、第2因子に約21%、第3・第4因子にそれぞれ約13%の項目が含まれている。第5因子はわずかに2項目にとどまり、しかも第1因子のと重複している。また第4因子までで全項目の約71%を説明できる。以上の諸点を総合的にみた結果、第1, 第2, 第3, 第4因子を取り上げ、それぞれFACTOR1 (以下、F1と略す)、同様にF2, F3, F4因子とした。

次に最終的に取り上げた4つの因子について検討する。表8からF1, F2, F3, F4因子別にそれぞれ、絶対値が0.3以上の負荷量を持つ項目を大きさ順に整理し、表9に示す。F2, F3因子は男性役割に関する因子であり、F1, F4因子は女性の役割に関する因子であることが表4の項目内容から読み取れる。以下、各因子について考察する。

男性役割に関する因子であるF2因子は、“活動的”、“男の子の興味”、“言葉遣いが悪い”といった項目に高い負荷量を持つ。従って、女性より男性により高く期待されている活動性、粗雑さに関する因子であろう。このことは、“感傷的”、“行儀がよい”といった項目に、この因子がマイナスの負荷量を持つことから裏付けられる。以上のことからF2因子を活発性の因子と呼ぶ。

もうひとつの男性役割に関する因子であるF3因子は、“乱暴”、“無頓着”といった項目に高い負荷量を持ち、粗暴性に関する因子とみられる。従って、これは粗暴性の因子と呼べよう。しかし同時に、“消極性”といった項目にも高い負荷量を持っている。これは“消極性”の項目が内気という特性を主にあらわすのではなく、

表8 各項目の因子分析

特性	FACTOR 1	FACTOR 2	FACTOR 3	FACTOR 4	FACTOR 5	FACTOR 6	FACTOR 7
1 男の子の興味	-0.01504	0.38737	0.09647	0.06464	0.05731	0.09601	0.13643
2 行儀がよい	0.36720	-0.35169	-0.09327	0.20397	0.02727	0.03941	-0.05819
3 臆病	0.59309	-0.19987	-0.08231	0.08156	0.06184	0.08094	0.12372
4 感傷的	0.13614	-0.46098	-0.00749	0.14067	0.16941	0.23783	0.08724
5 言葉遣いが悪い	-0.06800	0.37881	0.18713	0.04173	-0.02847	-0.22376	-0.18341
6 優しい	0.18617	-0.26123	-0.17881	0.01270	-0.02804	0.033482	-0.03302
7 言語能力	0.37587	0.08948	-0.07842	-0.02961	-0.02569	0.16568	-0.10149
8 乱暴	-0.25719	0.15605	0.53195	-0.00674	-0.01826	-0.09328	0.01886
9 活動的	0.00353	0.39530	-0.06072	0.03018	0.03289	-0.05035	0.10123
10 優柔不断	-0.01138	-0.02285	-0.02422	0.49963	-0.03687	0.03174	0.03901
11 理論的	0.35583	-0.07390	-0.07922	-0.16704	0.37927	0.09493	-0.05982
12 き帳面	0.22278	-0.04004	-0.26499	0.23720	-0.17063	0.23748	-0.13843
13 理性的	0.04632	-0.01475	-0.10564	-0.36861	0.11720	0.09126	0.15648
14 計算能力	0.03486	0.04596	-0.13206	-0.12272	0.57032	-0.06498	-0.02987
15 道徳的	0.24047	-0.06338	-0.08656	-0.04014	-0.04572	0.72645	-0.12413
16 支配的	-0.01630	0.08934	0.03998	-0.01933	0.09373	0.02578	0.10680
17 心配性	0.15878	0.11510	0.03129	0.43741	-0.03843	0.04382	0.05733
18 指導的	0.34777	-0.00284	-0.18831	-0.23927	0.04655	0.06670	-0.16325
19 攻撃的	-0.06557	0.05504	0.11285	-0.00457	0.00189	-0.04329	0.45194
20 愛情的	0.36842	-0.13541	-0.18204	0.11736	0.13673	0.12323	-0.26690
21 消極的	-0.06430	-0.00988	0.33562	0.09785	-0.06558	-0.00797	0.12853
22 自負	0.11888	0.11733	0.16091	-0.03302	-0.08920	-0.17398	-0.02834
23 依存的	0.04156	-0.07120	-0.02695	0.20063	0.14724	0.11162	-0.21247
24 無頓着	-0.05225	0.05313	0.43989	-0.05460	-0.17181	-0.34028	0.02056

表9 因子別項目の一覧表

F1因子		F2因子		F3因子		F4因子	
臆病	0.59	感傷的	-0.46	乱暴	0.53	優柔不断	0.50
言語能力	0.38	活動的	0.40	無頓着	0.44	心配性	0.44
愛情的	0.37	男の子の興味	0.39	消極性	0.34	理性的	-0.37
行儀がよい	0.37	言葉遣いが悪い	0.38				
理論的	0.36	行儀がよい	-0.35				
指導的	0.35						

非積極性あるいは面倒くささをあらわしていると考えられる。

女性役割に関する因子であるF1因子は、“臆病”、“言語能力”、“愛情的”、“行儀がよい”といった項目に高い負荷量を持つ。従って、男性より女性により高く期待されている優しさ、行儀のよさに関する因子であろう。しかし同時に、“理論的”、“指導的”といった項目にも高い負荷量を持つ。青年・成人においては指導的はむしろ、男性に期待される役割であるが（柏木、

1972）それが児童では女性において見られるというのは発達における性差を反映していると思われる。以上のことからF1因子を優しさと指導性との複合した因子と呼ぶ。

もうひとつの女性役割に関する因子であるF4の因子は、“優柔不断”、“心配性”といった項目に高い負荷量を持ち、判断力のなさに関する因子であろう。このことは、“理性的”といった項目に、この因子がマイナスの負荷量を持つことから裏付けられる。従って、F4因子を

従順の因子と呼ぶ。

因子分析の結果、男性に望ましいものとして期待されている特性は活発性と粗暴性という次元、女性に望ましいものとして期待されている特性は優しさ・指導性と従順という次元から成り立っている。しかも、この2次元間で相互に重複する特性はなく、男性・女性役割の独立した2つの側面をあらわしている。また、児童期における性役割は青年期の役割観に比べ、それぞれの特性はかなりニュアンスの異なる特性（F3における粗暴性、F1における優しさ・指導性等）を含んでおり、次元として多義的なものとなっている。つまり、役割は流動的に捉えられ、児童期においては女子の方に指導的な役割観が存在する。それは例えば、言語能力・身体的に女子が男子より優位であるということに関係していると思われる。

さらに、男女別・各学年別にも因子分析を行った結果は、全体の結果とほぼ一致した。

〔2〕 因子別得点による分析

児童は性役割を、男性・女性役割についてそれぞれ2つの次元で認知していることが示唆された。このような性役割の認知は流動的であり、各要因により当然変化すると考えられる。そこで、性役割認知の発達の傾向を各要因に着目して検討する。すなわち、1で明らかにされた性役割認知の4つの次元に沿って、被験者の学年、性の違いによるグループ間の比較を行う。表9で示した各次元ごとに高い負荷量を持つ項目を取り出し、F2・F3因子の項目について「男の子であると思う」という回答に+1点、その他の回答に0点を、F1・F4因子の項目について「女の子であると思う」という回答に+1点、その他の回答に0点を与えた。これを各次元ごとに合計し、因子別得点として算出した。各グループ別のこの4次元の因子別得点の平均値と標準偏差を表10に示す。

この因子別得点は、児童が男性・女性役割の各2つの次元の特性を、それぞれ該当する性に認知している高さを示す。つまり、この

表10 因子別得点の平均値とS.D.

		男性役割に関する因子				女性役割に関する因子			
		F2因子		F3因子		F1因子		F4因子	
		平均	S.D.	平均	S.D.	平均	S.D.	平均	S.D.
男子	2年生	4.38	0.94	2.08	1.07	3.66	1.74	1.17	1.01
	4年生	4.69	0.70	2.53	0.63	4.64	1.40	1.48	1.01
	6年生	4.83	0.52	2.37	0.82	4.62	1.27	1.57	0.98
女子	2年生	4.45	1.03	2.54	0.72	4.80	1.36	1.79	0.89
	4年生	4.78	0.59	2.69	0.57	5.02	0.94	2.13	0.87
	6年生	4.92	0.30	2.54	0.58	4.95	1.10	2.14	0.90

値が大きいほど男性・女性役割として各次元をみていることになる。

因子別得点は、表10にみられるようにその分布はあまり広がりを持たないが、各グループによって分布の仕方に差がある。以上の点を踏まえて、因子別得点を手がかりにグループ間の変動傾向を概観する。

表10の因子別得点をF1, F2, F3, F4因子に分け、性、学年別にプロットしたものが図2である。図2から4次元の有効性について相互に比較し、またグループ間の変動をみることができる。

まず、t検定を行い学年差について見てみる。F1因子については2年生男子と4年生男子間に差がある ($t = -4.25, p < .001$)。F2因子については2年生男子と4年生男子間 ($t = -2.21, p < .05$)、2年生女子と4年生女子間 ($t = -2.74, p < .01$)、4年生女子と6年生女子間に差がある ($t = -2.09, p < .05$)。F3因子については、2年生男子と4年生男子間に差がある ($t = -3.48, p < .001$)。F4因子については、2年生男子と4年生男子間 ($t = -2.08, p < .05$)、2年生女子と4年生女子間に差がある ($t = -2.78, p < .001$)。

同様に、性差について見てみる。F1因子においては、2年生男女間 ($t = -3.48, p < .001$)、4年生男女間に差がある ($t = -2.07, p < .05$)。F2因子においては、各学年とも男女間に差がない。F3因子においては、2年生男女間に差がある ($t = .001$)。F4因子に

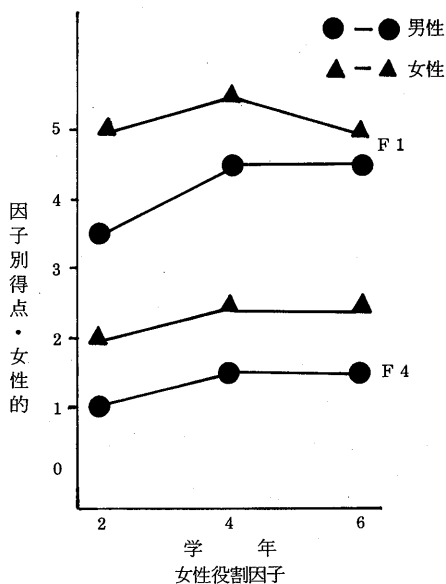
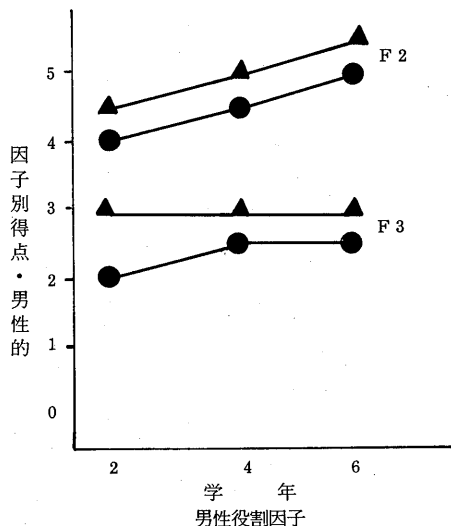


図2 因子別得点の各学年・男女別グループ別比較

においては、2年生男女間 ($t = -4.28, p < .001$), 4年生男女間 ($t = -2.74, p < 0.007$), 6年生男女間 ($t = -3.45, p < .001$) の全ての学年に差がある。

以上の結果から、まず学年については2年生から4年生にかけてグラフの値が上昇しているの、役割観がより明確になっていると言えよう。つまり、男性役割項目はより男性的なものとされ、女性役割はより女性的なものとなる。全体を見ると、4年生と6年生のあいだではほとんど差がなく各因子の役割観は安定していると言えよう。唯一、F2の因子の4年生女子と6年生女子のあいだに差があるのみである。これより、ほぼ4年生まで、この男性役割観(活発性)は安定したと言える。

次に性差については、学年の小さい方が大きく、しかも女子の方が因子別得点が高い。女子の方が高いのは、生得的に身体的・精神的に男子より発達が早く、性役割を早く獲得しやすいのであろう。F2因子では全学年全く男女間に差がなく、反対にF4因子では全学年男女間に差がある。

なお、各因子別得点の大きさの比較をする

と、図1に見られるように、各学年・男・女とも男性役割次元が女性役割次元より高い。このことは、男性役割の次元の方が女性役割の次元より児童にとって明確に識別されていることを示唆する。また、活発性(F2因子)の方が粗暴(F3因子)よりも男性役割の特性とされ、優しさ・指導性(F1因子)の方が従順(F4因子)よりも女性役割とされている。

従って、男性役割観(活発性)は性差を区別するうえで最もわかりやすい次元であり、女性役割観(従順)は最も分かりにくい次元であると言える。このことから、柏木の研究結果(1967)の示唆する一般に男性役割は明瞭に認知され、他方女性役割の認知はあいまいであるということが、児童においても認められるといえよう。

3. 児童の性役割観と性役割行動の関係の処理

1) 性役割行動の次元の分析

これまでは各次元ごとの結果を検討してきたが、その次元がどのように組み合わせられるかを見ていきたい。まず、性役割行動の性度の識別を次元を組み合わせることによりみていく。

3つの次元の中から、男性役割行動をあら

わすP1因子と女性役割行動をあらわすP2'因子に着目する。P1因子の得点の高い方から全体の40%の被験者を取り出し+とし、得点の低い方から全体の40%を取り出し-とする。同様にP2'因子も+と-に分けた。そして、新たにPA・PB・PC・PD因子を作った。PA因子(P1+, P2'+)は男子・女子どちらの性役割行動においても得点が高く、PB因子(P1+, P2')は男性役割行動においてのみ、PC因子(P1-, P2'+)は女性役割行動においてのみ得点が高く、PD因子(P1-, P2'-)は男性・女性どちらの性役割行動においても得点が低いことを示す。

2) 性役割観の次元の分布

性役割行動の次元と同様にして、性役割観の性度の識別をみていきたい。

4つの次元のF2とF3因子をひとつにまとめてF'1因子とし、F1とF4因子をひとつにまとめてF'2因子とする。F'1因子は男性役割観を、F'2因子は女性役割観をあらわす。従って、F'1因子の得点の高い方から全体の40%の被験者を取り出し+とし、得点の低い方から全体の40%を取り出し-とする。同様にF'2因子も+と-に分けた。そして、新たに以下に述べるようなFA・FB・FC・FD因子を作った。FA因子(F'1+, F'2-)は男子・女子どちらの性役割観においても認知の得点が高く、FB因子(F'1+, F'2-)は男性性役割観においてのみ、FC因子(F'1-, F'2+)は女性性役割観においてのみ認知の得点が高く、FD因子(F'1-, F'2-)は男性・女性どちらの性役割観においても認知の得点が低いことを示す。

3) 性役割行動と性役割観の関係の分析

各々の次元の分析によって得られた、PA・PB・PC・PD各因子とFA・FB・FC・FD各因子との関係を見るために全学年、各学年男女別にクロス表を作り、G.P.分析を行う。各クロス表は表11に示す。

表11-Aから男子と女子との傾向の違いを見る。男子では男性性役割観の認知が高く、極めて顕著である。そのうちで男性役割行動が顕著であるのが半数以上も占めている。女

表11-A 全学年のクロス表

	FA		FB		FC		FD		計	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
PA	2	6	0	3	0	1	3	1	5	11
PB	37	1	15	0	9	0	20	2	81	3
PC	0	27	0	1	2	2	1	5	3	35
PD	3	36	2	6	1	4	9	0	15	46
計	42	70	17	10	12	7	33	8	104	95

表11-B 各学年男女別のクロス表

2年生	FA		FB		FC		FD		計	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
PA	*1	4	0	2	0	1	2	1	3	8
PB	2	0	6	0	3	0	10	0	21	0
PC	0	13	0	1	2	1	0	4	2	19
PD	*0	5	1	1	0	1	4	0	5	7
計	3	22	7	4	5	3	16	5	31	34

4年生	FA		FB		FC		FD		計	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
PA	**0	2	**0	1	0	0	0	0	0	3
PB	10	1	4	0	0	0	5	1	19	2
PC	0	12	0	0	0	1	1	0	1	13
PD	**3	12	**0	3	0	1	2	0	5	16
計	13	27	4	4	0	2	8	1	25	34

6年生	FA		FB		FC		FD		計	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
PA	**1	0	*0	0	0	0	1	0	2	0
PB	25	0	5	0	6	0	5	1	41	1
PC	0	2	0	0	0	0	0	1	0	3
PD	**0	19	*1	2	1	2	3	0	5	23
計	26	21	6	3	7	2	9	2	48	27

注) * 5%有意差 ** 1%有意差

子では女性性役割行動が顕著なのが約40%ほどで、全体の過半数以上は男性性・女性的行動のどちらとも顕著ではない。また、男性・女性両方とも性役割観の認知が高い。

次に、表11-Bから、各学年別に傾向を見ると、2年生においては各セルに人数が散らばって分布しているが、学年が高くなるほど一定のセルに人数が集中してくる。そして、性役割行動、特に男性性役割行動は、性役割認知が確立される以前の段階の2年生から既に顕著に示される。男性的行動は性役割観が

確立されるにつれ、学年が高くなると共に顕著に示される。女性的行動は学年が高くなると共に顕著でなくなり、男性的・女性的行動をどちらもとらない傾向が顕著となる。

各学年男女別に検討していく。表11-Bの各セルの男女別の有意差を検定すると、2年生ではFA因子とPB因子、FA因子とPD因子とのセルに5%以下のレベルで、4年生ではFA因子とPB因子、FA因子とPD因子、FB因子とPB因子、FB因子とPD因子とのセルに1%以下のレベルで、6年生ではFA因子とPB因子、PD因子とFA因子、FB因子とPB因子、FB因子とPD因子とのセルに1%以下のレベルで有意差が認められた。

以上の検定結果をふまえて、各学年の男女差を検討する。2年生では男子は男性役割行動を顕著にとっているが、性役割観については男性・女性について認知していない児童が半数もいて、まだ十分に性役割観が確立されているとはいえない。すなわち、2年生男子の典型的な型としては、性役割行動として男性役割行動をとっているが、性役割観はまだ確立されていない。2年生の女子は、性役割行動として女性性行動をとっているのは約半数であるが、女性性役割観については男性・女性の両方とも性役割観を認知しているのは70%にも達する。2年生女子の典型的な型は、性役割行動として女性役割行動をとり、性役割観は男性・女性についてははっきり確立されている。

4年生男子は、性役割行動としては男性役割行動をとるのが75%であり、女性役割行動をとるのはほとんどない。男性性役割行動についても、男性・女性両方の性役割観の認知を70%近くの男子が認知できている。つまり、4年生男子の典型的な型としては性役割行動として男性役割行動をとり、男性・女性両方の性役割観、少なくとも男性性役割は十分に確立されている。4年生女子では、性役割行動としては男性・女性性役割行動ともどちらもとらないというのが半数である。性役割観については、男性・女性両方とも性役割観

を認知できるのが80%にも達する。男性性役割観と女性性役割観とを較べてみると男性性役割観の方がより高く認知されている。4年生の女子の典型的な型としては、性役割行動としては女性役割行動を一応とるが、2年生女子ほど積極的なものではない。性役割観は男性・女性両方においてかなり高く認知されている。

6年生男子では性役割行動として男性役割行動をとるのが85%まで達し、女役割行動をとるのはまったくいない。性役割観は男性・女性両方においてかなり明確に確立されている。6年生男子の典型的な型は、4年生男子と同様に性役割行動においては男性役割行動をとり、性役割観もほぼ完全に確立されている。6年生女子では性役割行動として女性役割行動はほとんどいなくなり、男性・女性役割行動をどちらもとらないのは85%を占める。性役割観は男性・女性ともにおいて明確にほぼ完全に認知されている。6年生女子の典型的な型は性役割行動は男性・女性役割行動ともほとんど顕著でなくなり、性役割観は男性・女性において80%は確立しているし、どちらか一方のみであれば90%まで確立している。

以上の結果、G.P.分析により性役割行動と性役割観とを検討すれば、男性役割行動と男性性役割観との間には相関関係があるが、女性役割行動と女性性役割観との間には相関関係はないことが示唆された。

結 論

以上の結果、以下のことが明らかにされた。

1) 因子分析の結果、性役割行動としては、3つの次元(男子のよくやる遊び、女子のよくやる遊び、男子も女子もよくやる遊び)で構成されている。性役割観としては、男性性をあらわすものとして、活発性と粗暴性という2つの次元、女性性をあらわすものとして、優しさ・指導性と従順という2つの次元から構成されている。

2) 性役割行動については、男子の2・4

・6年生各学年とも男性的行動をとる傾向が顕著であり、学年が高くなるほどその傾向が増す。しかし、女子においては2年生が最も女性役割行動をとり、その後4・6年生では学年が高くなるほど男性・女性役割行動ともとらなくなる傾向が顕著である。

3) 性役割観については、2年生においてはまだ役割が明確に認知されていないが、4・6年生においては安定した役割が認知されている。次元については活発性の次元が最も認知されやすく、従順の次元が最も認知されにくい。

4) 性役割観における性差は学年が高くなるほど小さくなる。また、全学年を通して、男子より女子の方が性役割認知が安定している。特にこの傾向は、4年生以上の学年で顕著である。その理由として、小学4年生の段階では身体的成熟をはじめ、情緒・興味・社会的態度など多くの心理的側面において、男子より女子の方が早く発達するからであろう。Mussen, 他(1959)の指摘によれば、この女子の早熟さは身長・体重などの思春期的成長および、性的成熟が女子に早い時期に到来することにひとつの起因があり、多くの心理的発達はこの身体的成熟に誘発され促進されるということである。また、柏木、東らの研究(1971)では、女子は早くから高い依存性、既成の価値、習慣への従順さ、受容性を持つため男子より役割認知が安定していることが指摘されている。

5) 男子は男性性役割観が完全に確立されるにつれて男性役割行動も顕著となる。しかし、同時に男性性役割観がまだ内面化されないうちから男性役割行動は成り立っていることも示唆された。女子においては、女性性役割観が早いうちから内面化され4年生の段階ではほぼ確立されるが、女性役割行動は学年が高くなるほど顕著ではなくなる。

6) 第3の目的の性役割観が性役割行動を規定するという仮説は女性性役割においては支持されなかった。しかし、逆に性役割行動が性役割観を規定するともいえない。この様

な結果を導く原因のひとつとして考えられることは、男性性役割行動は性役割観の確立に関係なく低学年から行動にあらわれやすいが、女性性役割行動は役割観が内面化されていても行動としてあらわしにくいことがあげられる。

引用文献

- 東・田中・土屋 1973 性役割認知の発達 教育心理学研究, 21, 48~53
- Emmerith, W. 1959 *Young children's discrimination of parent and child role*, Child Development, 30, 403-419
- 石田英子 1987 児童期における性役割の認知 お茶の水女子大学人間発達研究, 12, 12-18
- 柏木恵子 1967 青年期における性役割認知 教育心理学研究, 15, 193~202
- 柏木恵子・東洋 1971 児童における“よい子” “わるい子”の概念とその発達 心理学研究, 41, 295~306
- 柏木恵子 1972 青年期における性役割認知 教育心理学研究, 20, 48~58
- 小橋川恵 1959 児童の性役割選択に関する発達の研究 心理学研究, 30, 273-277
- 小橋川恵 1966 幼児・児童の性役割行動に関する最近の研究 教育心理学研究, 16, 216-229
- 小橋川恵 1969 「性差と性役割の獲得」 児童心理学講座 8 人格の発達 第5章, 金子書房
- Lynn, D. B. 1959 *A note on sex differences in the development of masculine and feminine identification*, Psychology Review, 66, 126-135
- 間宮武 1959 性差研究の体系化と性差意識に関する研究 教育心理学研究, 6, 205-215
- Mead, M. 1961 「男性と女性」上下 加藤・田中共訳 創元新社
- Mussen, P. H. & Distler, L. 1959 *Masculinity, identification and father-son relationships* J. abnorm. soc. Psychology., 59, 350~356
- Sears, R. R. Raw, L. & Alport, R. 1965 *Identification and Child Rearing* Javistoik